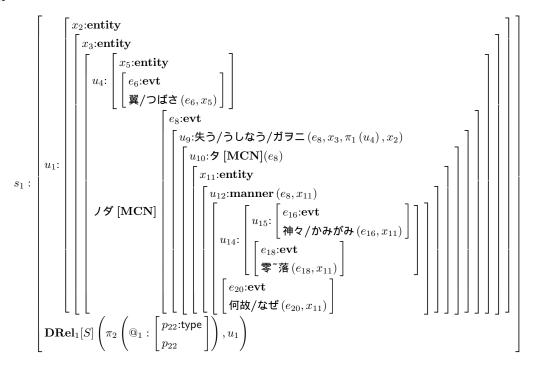
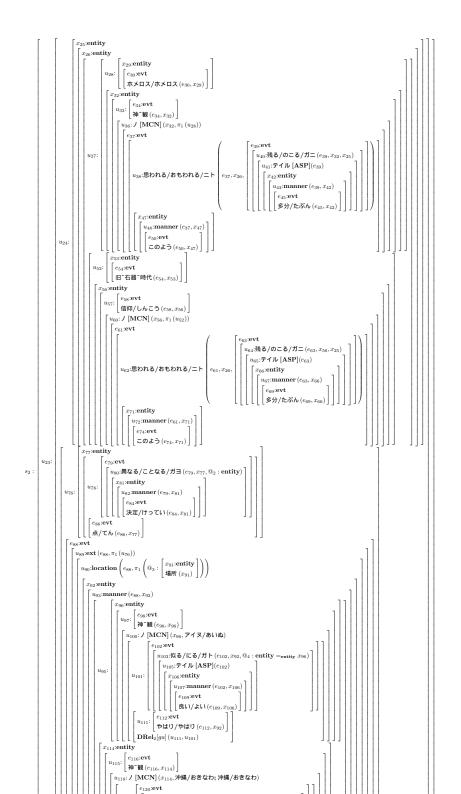
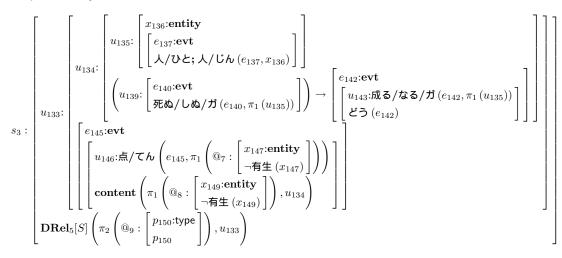
[1] 神々の零落 なぜ翼は失われたのか



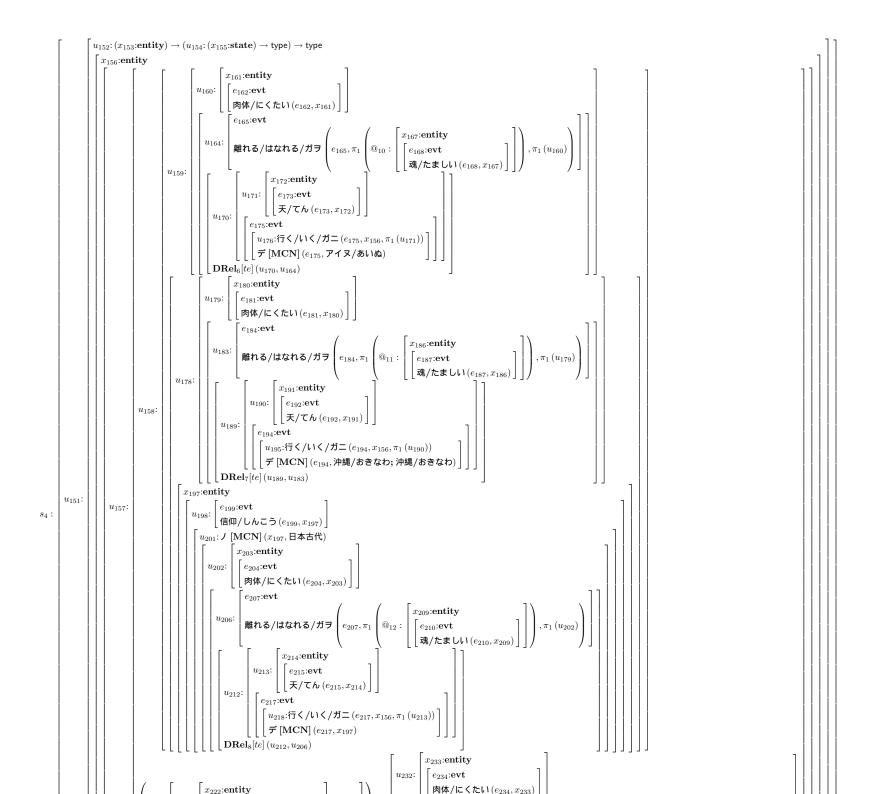
[2] このようにホメロスの神観は、旧石器時代の信仰が多分に残っていると思われるアイヌや沖縄の神観とよく似ているが、やはりそこに決定的に異なる点がある。



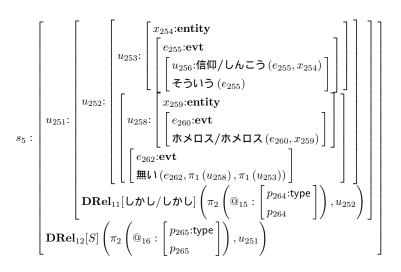
[3] それは、人が死ぬとどうなるかという点である。



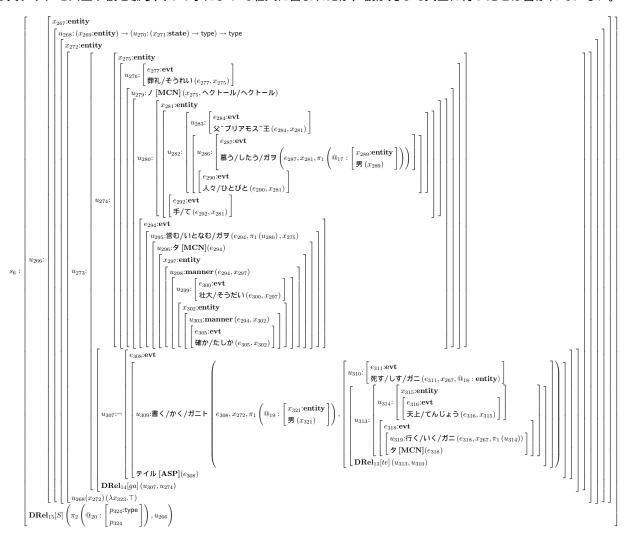
[4] アイヌや沖縄や日本古代の信仰では、やはり人間は死ぬと、その魂は肉体を離れて天へ行く。



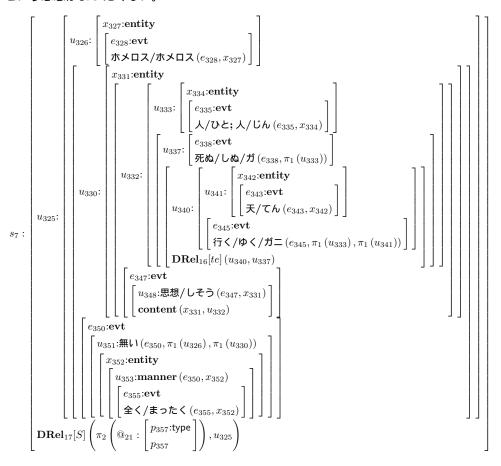
[5] しかし、そういう信仰はホメロスにはない。



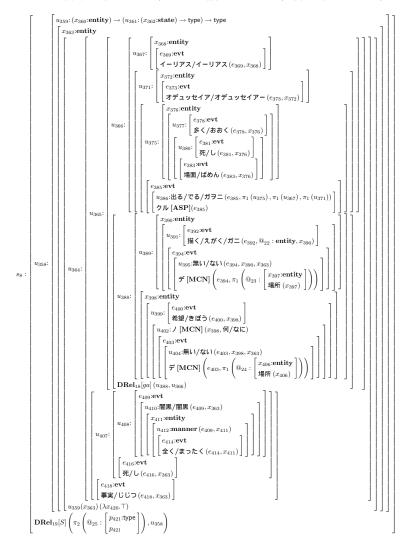
[6] 確かにヘクトールの葬礼は父プリアモス王や彼を慕う人々の手によって壮大に営まれたが、彼が死して天上に行ったとは書かれていない。



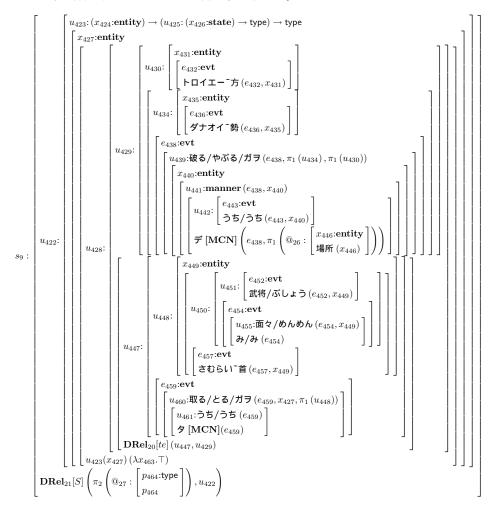
[7] ホメロスには「人が死んで天に行く」という思想がまったくない。



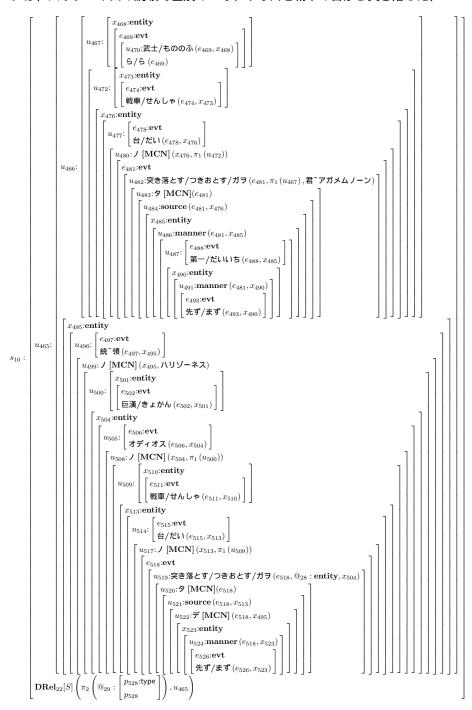
[8] 『イーリアス』も『オデュッセイアー』にも多くの死の場面が出てくるが、そこで描かれるのは、何の希望もない、まったく闇黒なる死の事実である。



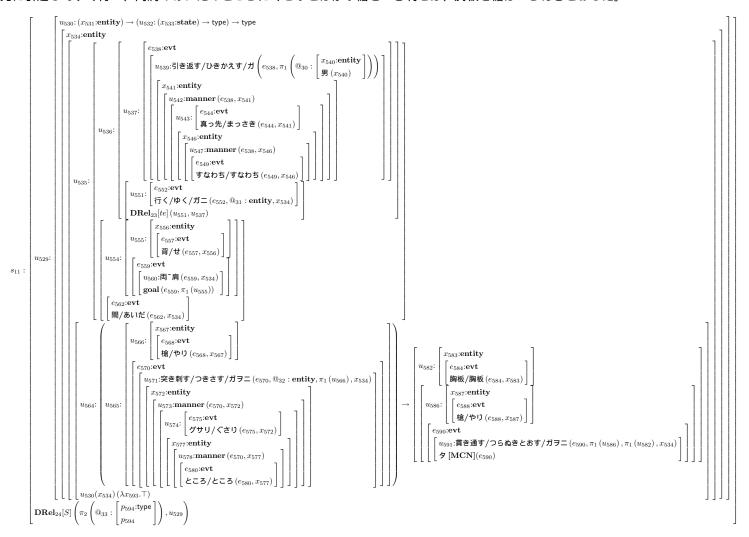
[9] そこでトロイエー方をダナオイ勢はうち破って、武将の面々みなさむらい首をうち取った。



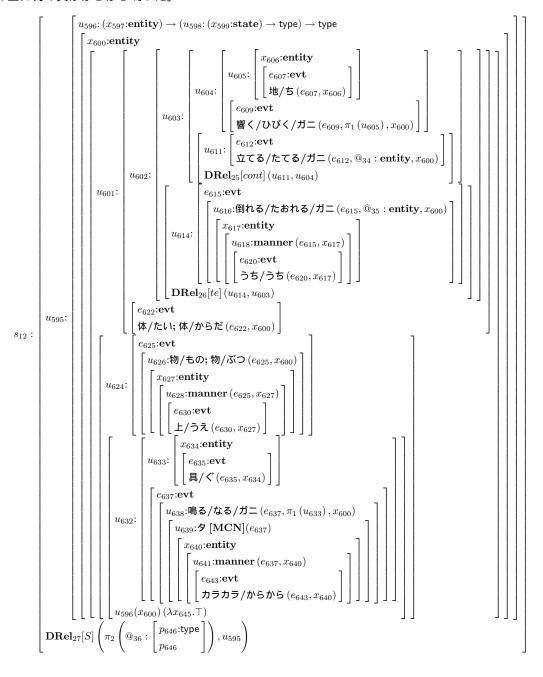
[10] まず第一にもののふらが君アガメムノーンは、ハリゾーネスの統領で巨漢の オディオスを戦車の台から突き落した、



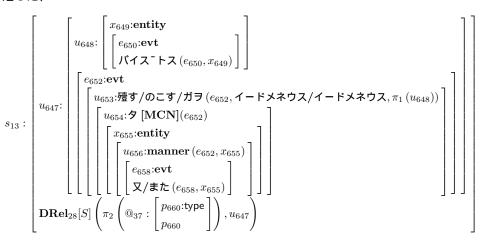
[11] 則ち彼がまっ先に引返してゆく背へ、両肩のあいだのところにぐさりとばかり槍をつき刺せば、胸板を槍はつらぬきとおした。



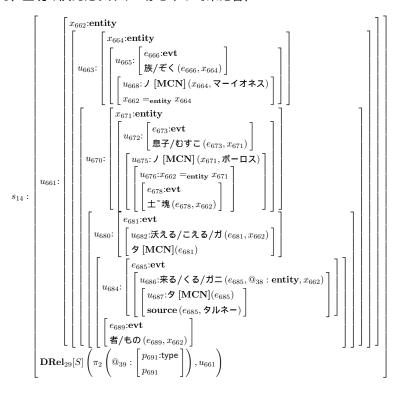
[12] 地ひびき立ててうち倒れる、体の上に物の具がからから鳴った。



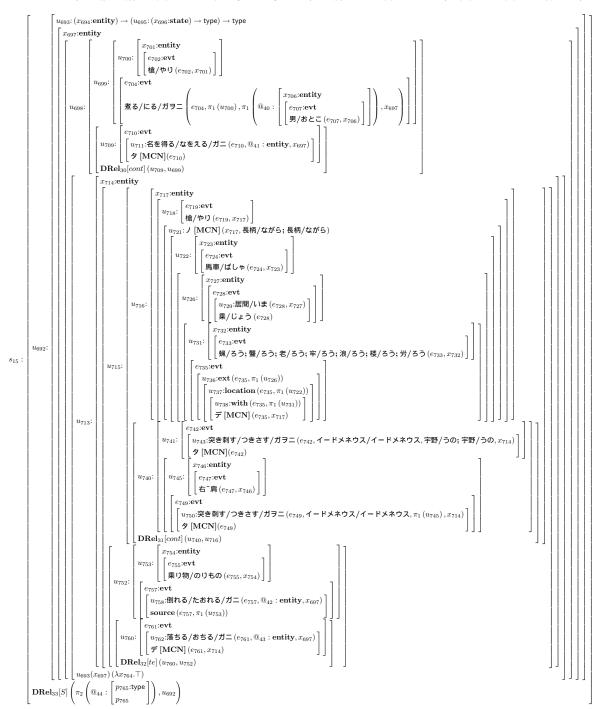
[13] またイードメネウスは、バイストスを殪した、



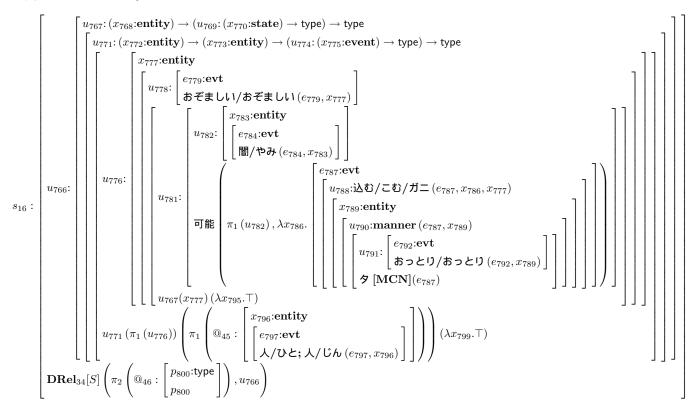
[14] マーイオネスの族なるボーロスの息子でもって、土塊の沃えたタルネーからやって来た者、



[15] この男を槍に名を得たイードメネウスが、長柄の槍で馬車にいま乗ろうというのを、右肩をつき刺したので、乗物から倒れて落ちる、



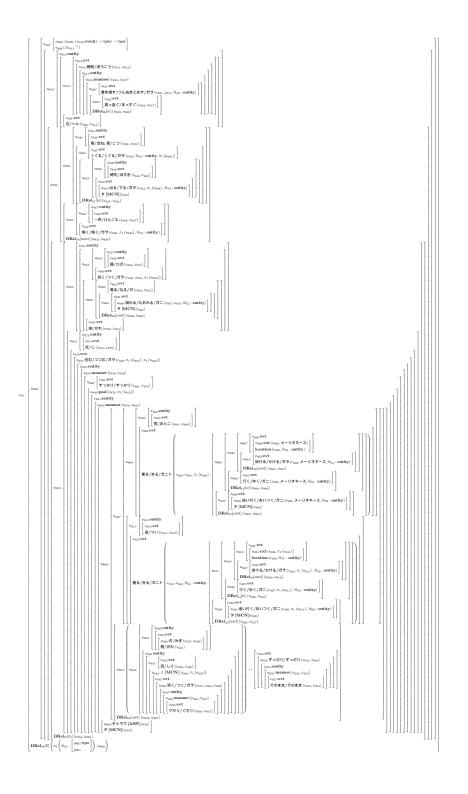
[16] その人を、おぞましい闇がおっとりこめた。



[17] (中略)

$$s_{17}$$
: $\begin{bmatrix} x_{802} : \mathbf{entity} \\ e_{803} : \mathbf{evt} \\ \mathbf{pe}/$ ちゅうりゃく $(e_{803}, x_{802}) \end{bmatrix} \end{bmatrix}$ $\mathbf{DRel}_{35}[S] \left(\pi_2 \left(@_{47} : \begin{bmatrix} p_{805} : \mathsf{type} \\ p_{805} \end{bmatrix} \right), u_{801} \right) \end{bmatrix}$

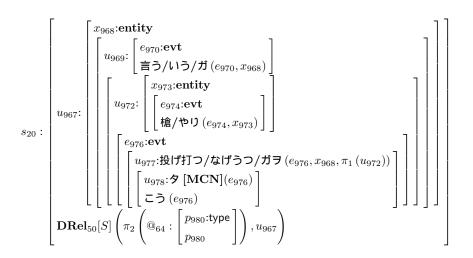
[18] その男をメーリオネースが、追い掛けてゆき追いついたとき、右側の尻をぐさりと突けば、そのままずっぷり貫きとおして、まっすぐに膀胱の辺へ 骨をくぐって穂先が出たのに、一声喚いて膝を突くなり倒れた彼を、死がすっかり包んでしまった。



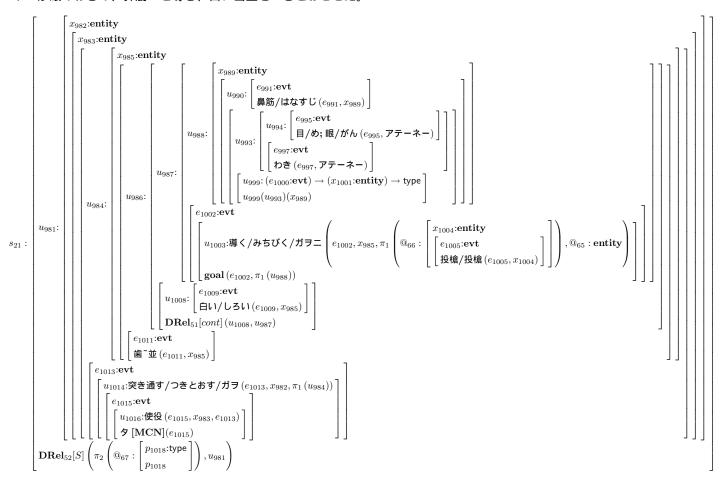
[19] (中略)

$$s_{19}: egin{bmatrix} x_{963} ext{:entity} \ e_{964} ext{:evt} \ ext{中略/ちゅうりゃく} \left(e_{964}, x_{963}
ight) \end{bmatrix} \ \mathbf{DRel}_{49}[S] \left(\pi_2 \left(@_{63}: \left[egin{array}{c} p_{966} ext{:type} \\ p_{966} ext{]}
ight), u_{962}
ight) \end{bmatrix}$$

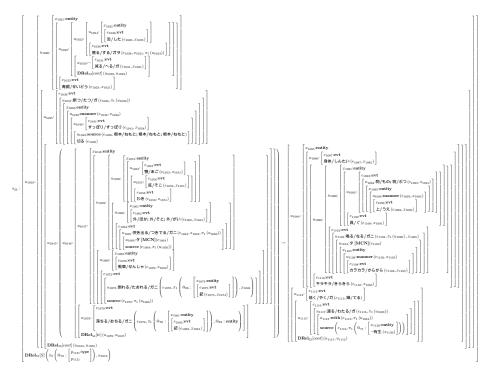
[20] こう言いながら (槍を)抛った、



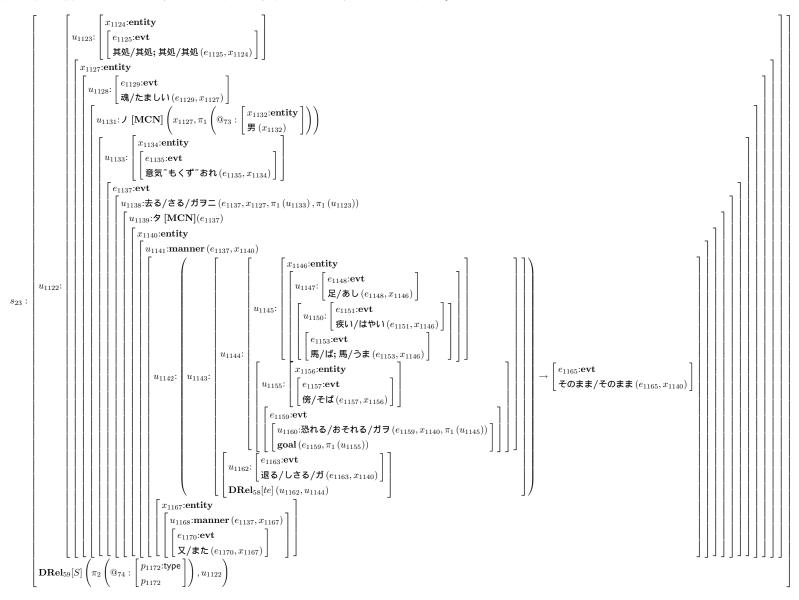
[21] その投槍をアテーネーが眼のわきの、鼻筋へと導き、白い歯並をつきとおさせた。



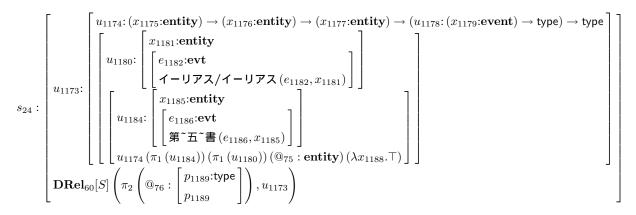
[22] それから舌を、磨り減らない青銅が 根本からすっぽり断ち切り、その鋩は 顎の 底のわきから外へ つき出たのに、戦車から倒れて落ちれば、身体の上に物の具がからから鳴った、きらきらと輝やき渡って。



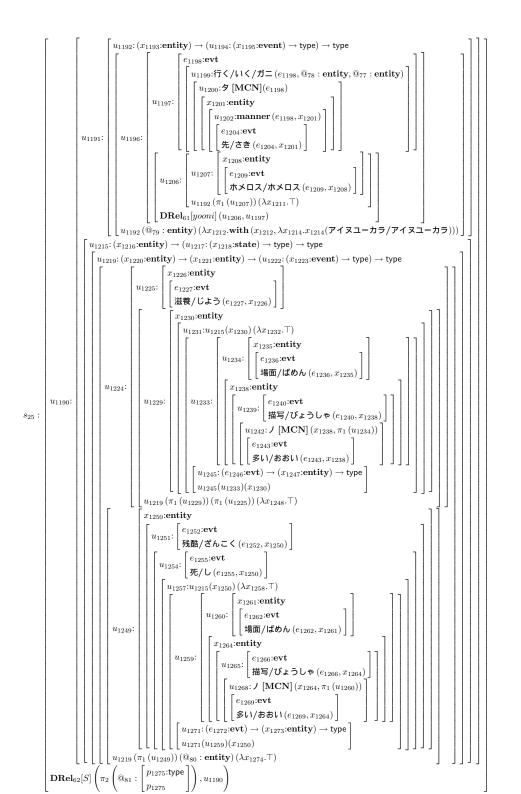
[23] また足の疾い馬さえ傍へ恐れて退れば、そのまま其処に、彼の魂も意気もくずおれ去った。



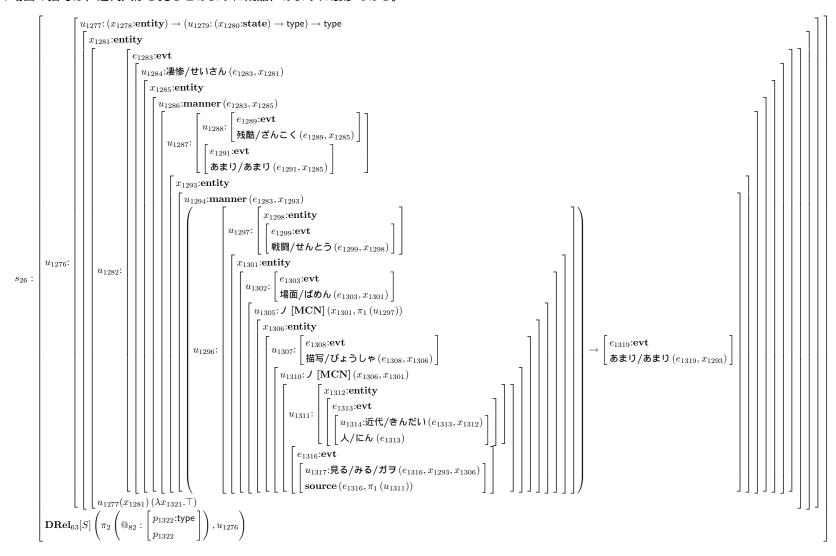
[24] (『イーリアス』第五書)



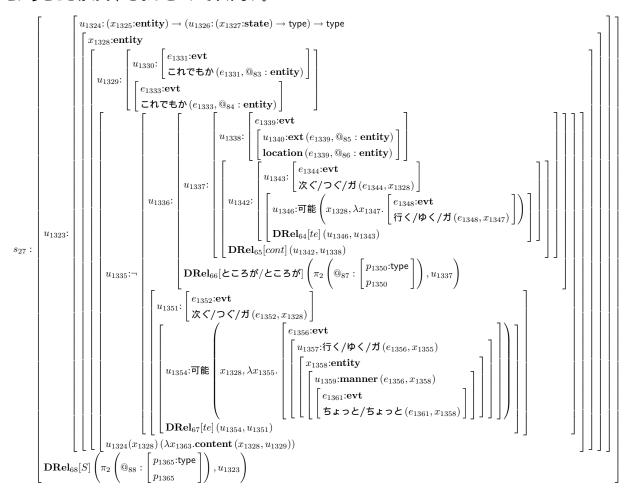
[25] 先にいったように、ホメロスには、「アイヌユーカ」と同じように、残酷な死の場面の描写が多い。



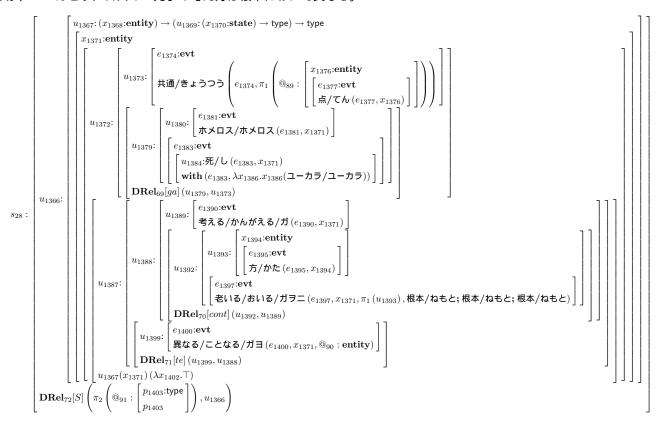
[26] 戦闘の場面の描写は、近代人から見るとあまりに残酷、あまりに凄惨である。



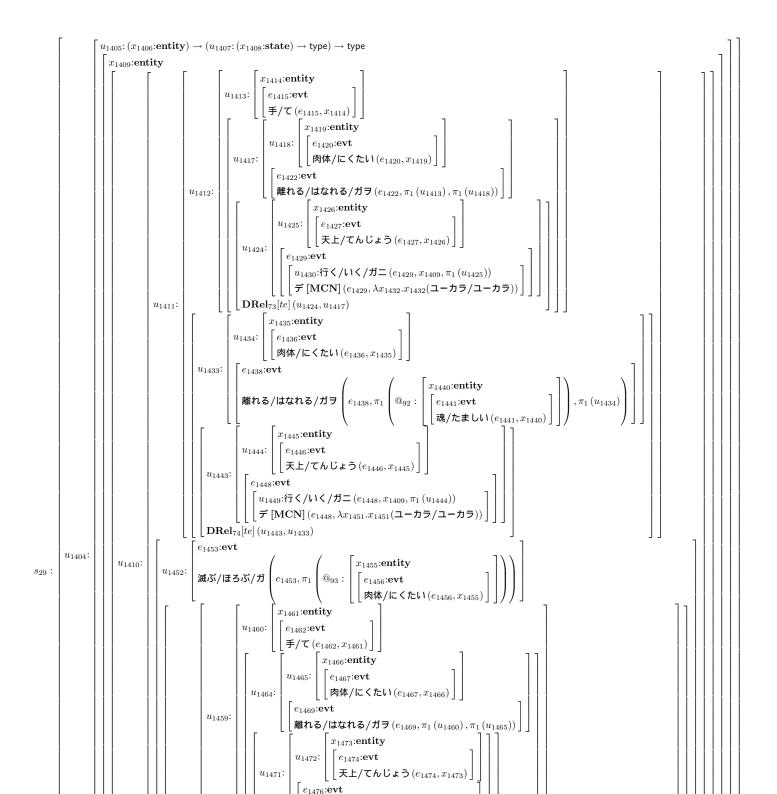
[27] これでもか、これでもかというところがあり、ちょっとついてゆけない。



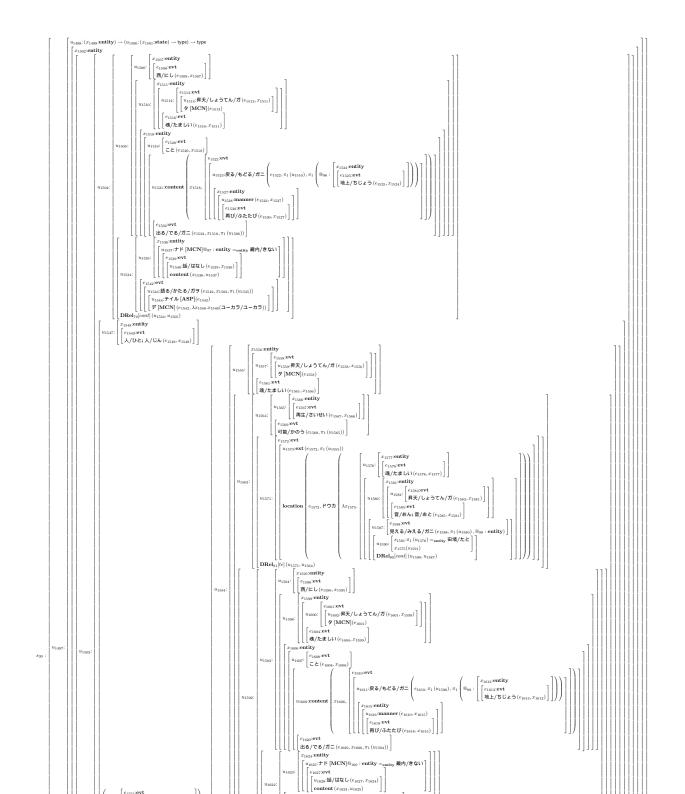
[28] この点は共通であるが、ユーカとホメロスの「死」の考え方は根本において異なる。



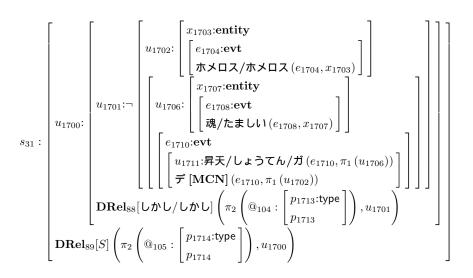
[29] ユーカでは、その肉体は滅びても、その魂は肉体を離れて天上に行く。



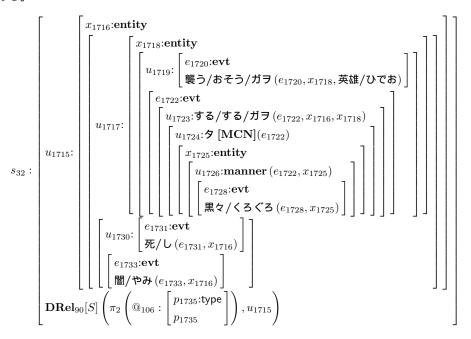
[30] ユーカでは、人が死ぬと「魂が昇天する音」が聞こえたとか、東に昇天した魂は再生可能であるが、西に昇天した魂は再びこの地上にもどることはできない、などという話が語られている。



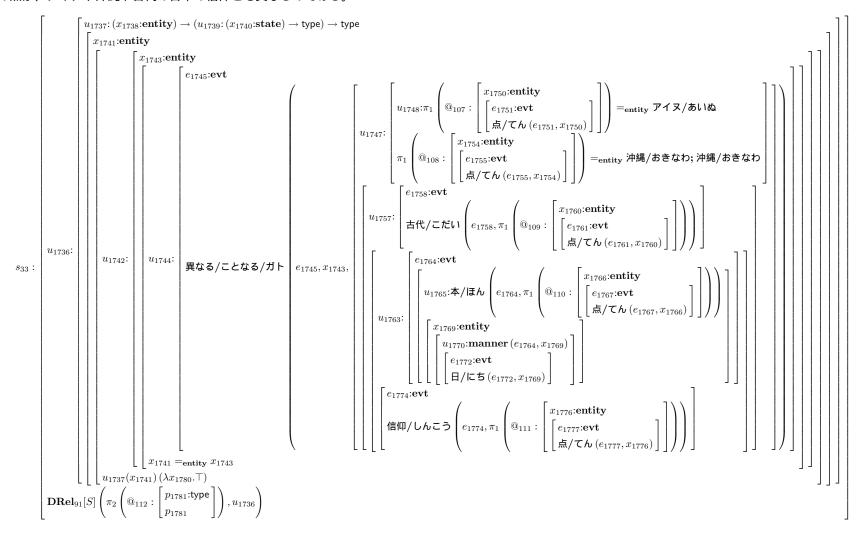
[31] しかしホメロスでは魂は昇天しない。



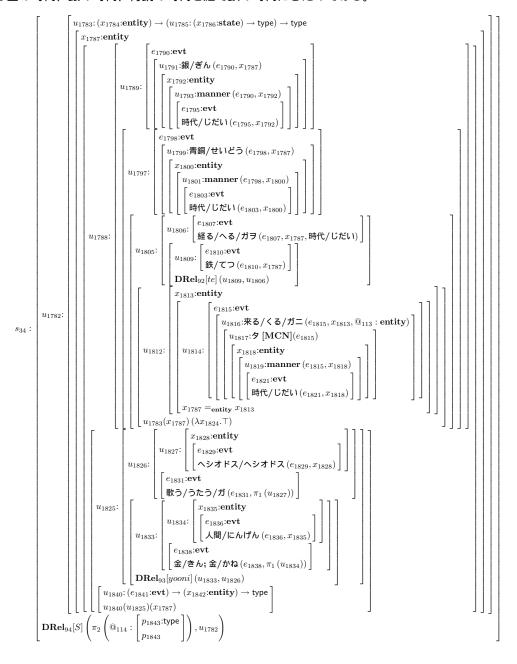
[32] 英雄を襲うのは、黒々とした死の闇である。



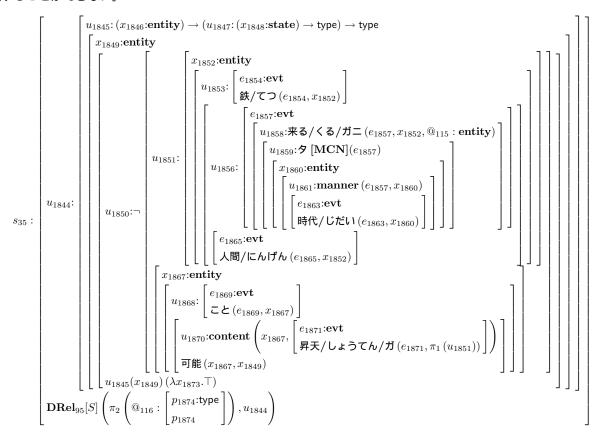
[33] この点が、アイヌや沖縄や古代の日本の信仰とも異なるのである。



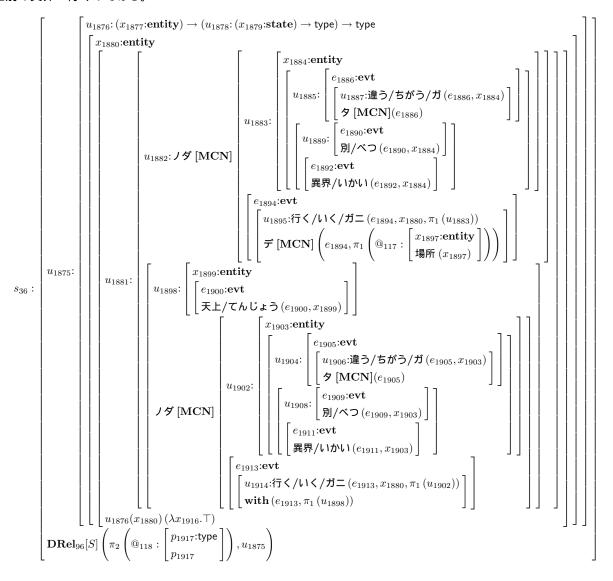
[34] ヘシオドスが歌うように、人間は金の時代、銀の時代、青銅の時代を経て鉄の時代にきたのである。



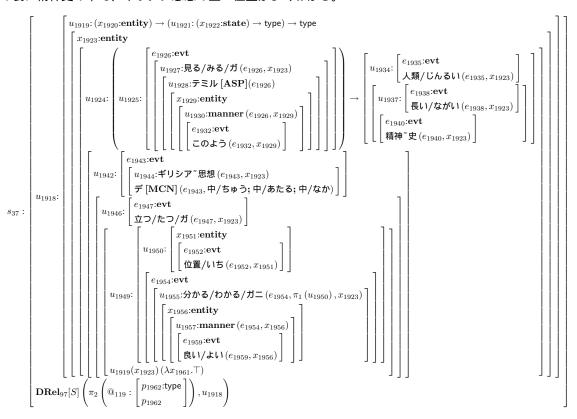
[35] 鉄の時代にきた人間は昇天することができない。



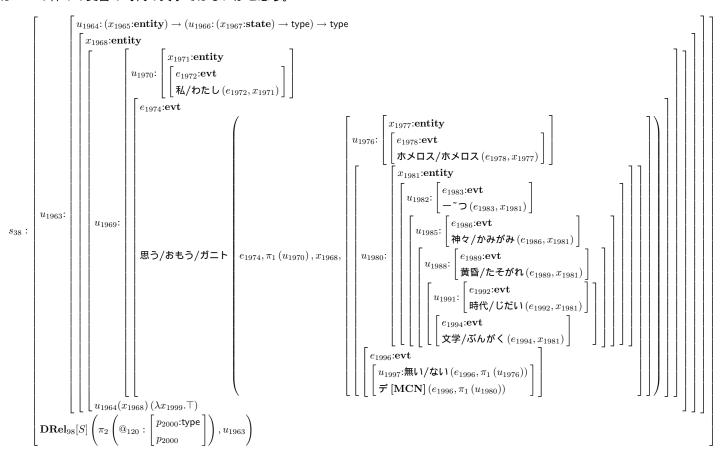
[36] そこで、天上とはちがった別の異界へ行くのである。



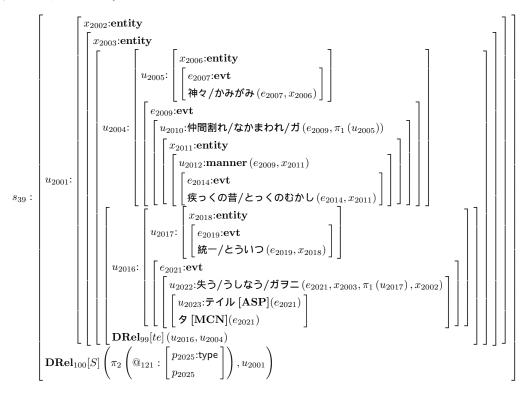
[37] このように見てみると、人類の長い精神史の中で、ギリシア思想の立つ位置がよくわかる。



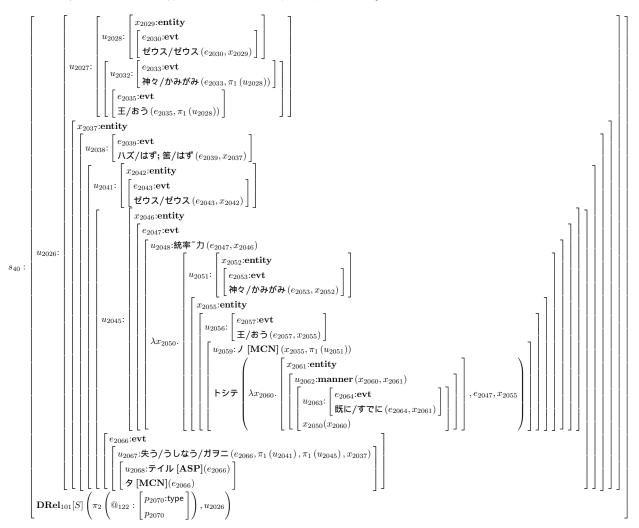
[38] 私は、ホメロスは一つの神々の黄昏の時代の文学ではないかと思う。



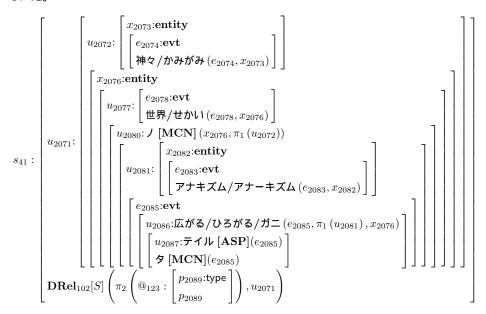
[39] 神々はとっくの昔に仲間割れして、統一を失っていた。



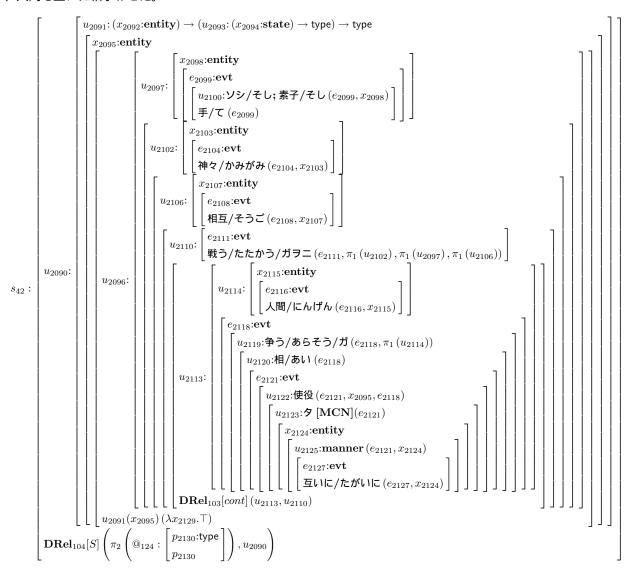
[40] ゼウスが神々の王であるはずなのに、ゼウスはすでに神々の王としての統率力を失っていた。



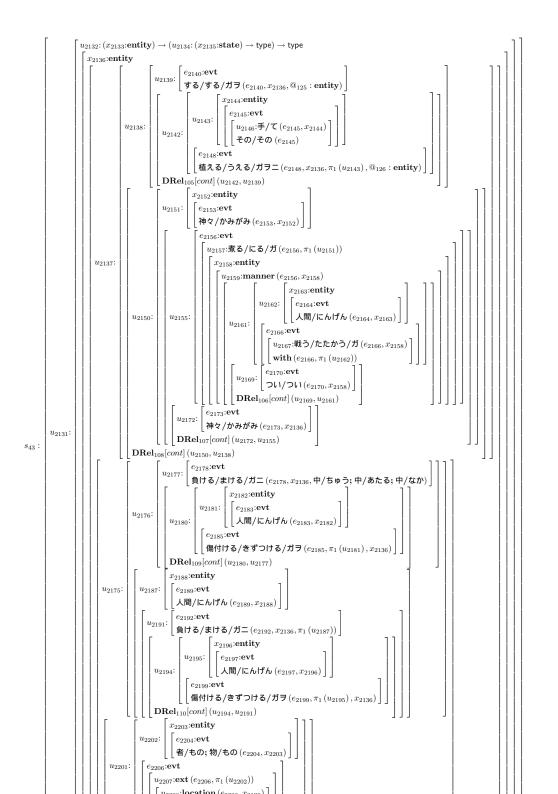
[41] 神々の世界にはアナーキズムが広がっていた。



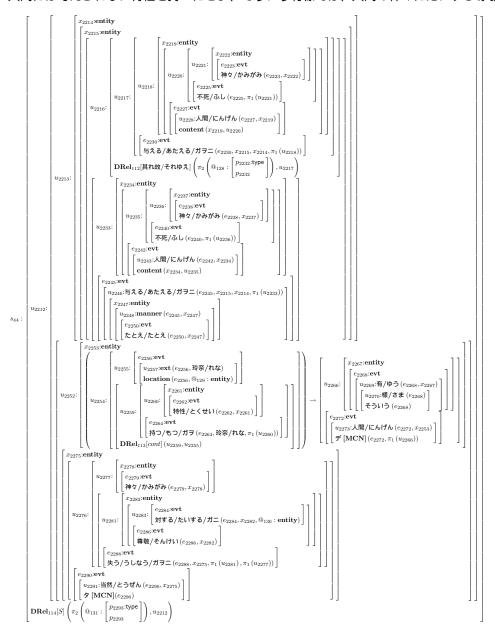
[42] そして神々は相互に戦い、人間も互いに相争わせた。



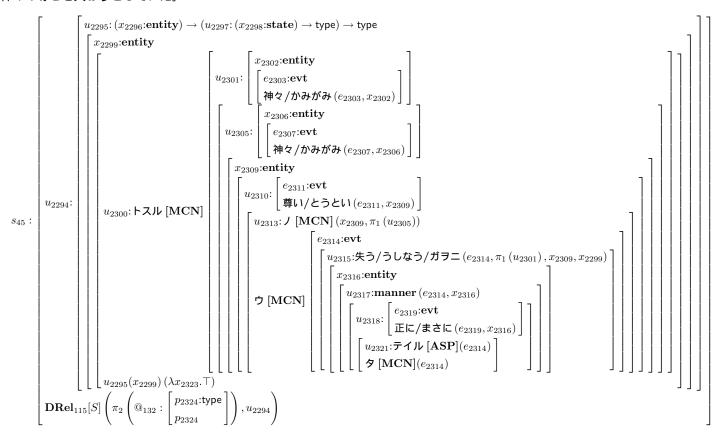
[43] そしてそのうえ、神々は人間とも戦い、ついに神々の中には、人間に負け、人間に傷つけられるものすらあった。



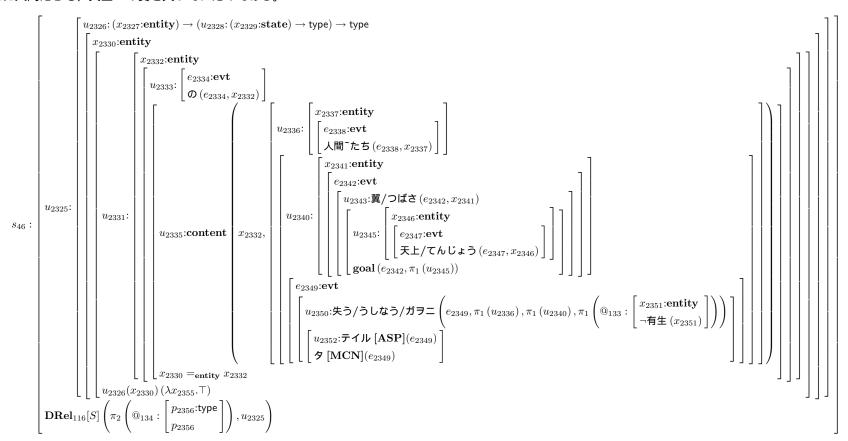
[44] それゆえ、たとえ神々が不死という、人間には与えられない特性を持つにせよ、そういう有様では、人間の神々にたいする尊敬を失うのは当然であった。



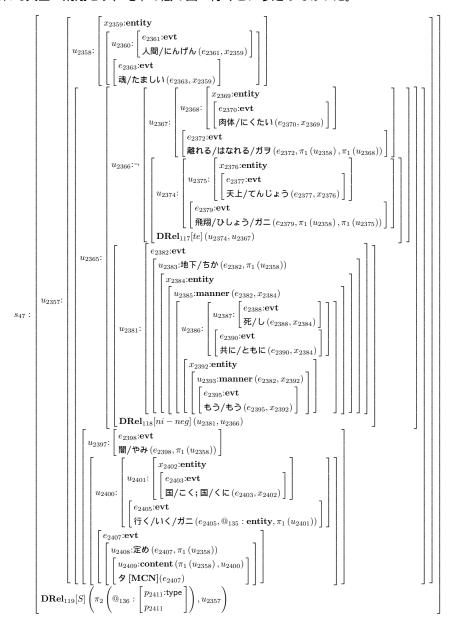
[45] まさに、神々は神々の尊さを失おうとしていた。



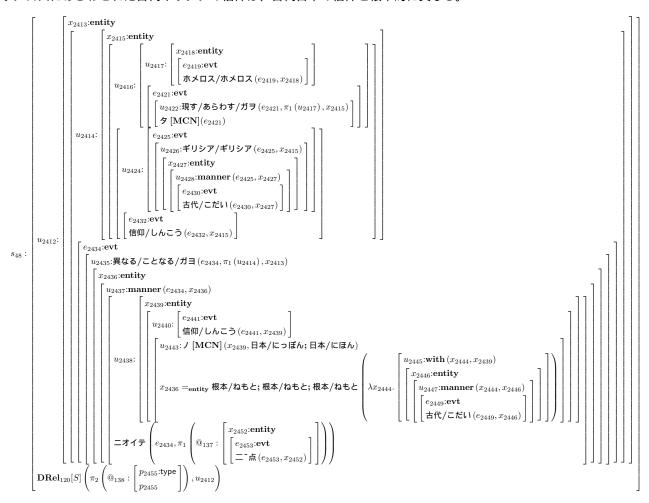
[46] それに人間たちも、天上への翼を失っていたのである。



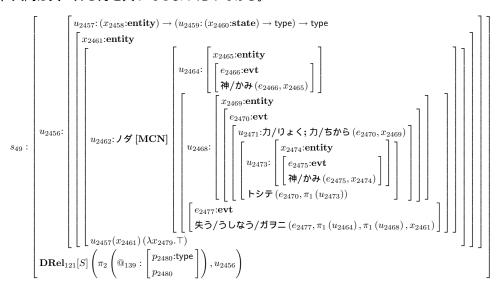
[47] 人間の魂は、もう、死とともに肉体を離れて天上へ飛翔せず、地下の闇の国へ行くという定めであった。



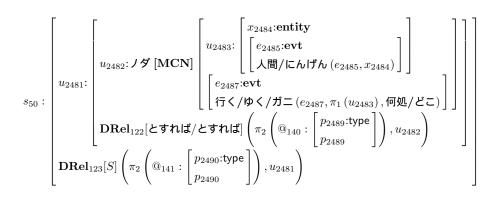
[48] この二点において、ホメロスにあらわされた古代ギリシアの信仰は、古代日本の信仰と根本的に異なる。



[49] 神が神としての力を失うとともに、人間は天へ昇る力を失ってしまったのである。



[50] とすれば、人間はどこへ行くのか。



[51] それを明らかにするのが、『オデュッセイアー』で描かれるオデュッセウスの異境めぐりの話である。

